

ヴァラナシのガートにみる信仰

宮 崎 智 絵

1. はじめに

インドのヴァラナシは、聖地として非常に有名である。内外から多くの巡礼者が訪れ、巡礼をするとともに死を迎える場所ともなっている。なぜならヴァラナシは、輝ける十二シヴァ神象 (Dvādāśa joti linga)、七聖都 (sapta purī)、三聖都、五十一母神座所 (Ikkyāvan śakti pīth) の四つの聖地に名を連ねているからである。また、『マツヤ・プラーナ』『アグニ・プラーナ』『カリヤーナ』『クリティカルパタル』『アルベールーニー』『アブール・ファスル』の書物がヴァラナシを聖地としている¹⁾。そして、この聖都にはヴィシュヴェーシュヴァラ神を中心にして同心円状の広がる7つの円環が、中心から8つの方向に引かれた線と交わる点56カ所にガネーシャ神が位置し、この都城を守っているといわれる。この56カ所はガネーシャが方角神 (ディクバーラ) あるいは門神 (ドヴァーラバーラ) として魔法陣のように結界を形づくり、シヴァ神に敵対するものの侵入を阻んでいる²⁾。それゆえにヴァラナシはシヴァ神の聖地というだけではなく、シヴァファミリーの聖地でもあり、シヴァ神だけではなくガネーシャ神の神像も多く祀られているのである。

そして、インドにおいてガンジス川というのは非常に特別な川であり、一般に「ガンガー」と呼ばれている。ヴァラナシは聖地の中でも特別とされているが、ガンジスがヴァラナシの手前で大きく蛇行し、北の方向に一端方向を変えるからである。北の方向には、シヴァ神の住処であるヒマラヤのカイラース山があり、ガンジスはその中流域のヴァラナシに至り、シヴァ神から神聖で高貴なエネルギーをも

らい、川の生命力を復活させ再生ことからヴァラナシが新たなる生命を授かる特別な場所とされてきた。さらに、ヴァラナシがどの聖地よりも重要視されるのは、シヴァ神に愛され護られているこの聖地で死ぬば、そのまま解脱が得られるという信仰に支えられているからである。また、ヴァラナシは、シヴァ神が持つ三叉の戟の上にあるとされ、全世界が大洪水で水没してもヴァラナシだけは残ると信じられている。そして、シヴァ神のリングが最初に地球を貫いた場所なのである³⁾。

このようにヴァラナシは、インドにおいて宗教機能をもった特別な都市である。そこで以前、筆者はヴァラナシについて、宗教都市の機能と現地調査をもとにこの地域の信仰の実態について論じることにより民衆によるヒンドゥー教の信仰の実態を明らかにしようと試みた⁴⁾。その際の現地調査の対象は路地における信仰であったが、今回はガンジス川のガートを調査し、路地の信仰と比較することによってヴァラナシの宗教構造の一端を分析していくこととする。

2. 川の信仰とガート

古来より水および川に対する信仰は、世界各地に見受けられる。メソポタミア文明では、世界の創造に先立って原初の水が存在し、その水同士の水の混合から万物が生み出され、やがてその水の支配を通して世界秩序の基盤が築かれたとされているのである⁵⁾。古代エジプトでは直接「ナイル」や「水」そのものを有力な神として崇拝することはなかったが、創成神話では水は重要な位置を占めている。世界の始まりには「ヌン」と呼ばれる「原初の水」が存在し、そのなかから「原初の丘」（最初の陸地）が現れ、そこに最初の神である太陽神が出現したという。創成神話において、神々の誕生以前から存在するヌンは「混沌」を象徴しており、神々の誕生とともに世界と秩序が現れたのである。混沌の象徴である水は、世界を創造する活力を内包した存在であったが、他方で常に外側から神々と人間の世界の秩序を脅かす存在と考えられていたようである。また、新王朝時代に、原初の水ヌンは冥界にも存在すると考えられており、死者の再生・復活を助けたという⁶⁾。つまり、原初の

水は生と死の両方を内包する原理であり、古代エジプトの水に対する思想がここに現われている。さらに古代エジプトにおいてナイル川自体は神格化されなかったが、増水期のナイルは「ハピ」という神として崇拝された。ハピ神は男神で特定の神殿を持っていなかったが、エジプト各地で崇拝されていた。「ハピの讃歌」では、ハピは大地、魚、鳥類、穀物、動物、人間など、すべてを水で潤して豊饒の恩恵を与えするという⁷⁾。古代エジプトにおいて増水するナイル川は恵をもたらすものとして重要であったが、川そのものに対する神の成立には至らなかった。増水するからこそナイル川は重要なものであり、ここにより重点が置かれていたからであろう。

このように水、川と大きな関わりをもつメソポタミアと古代エジプトでは水を原初の水と位置付けているが、インドのように水や川に関連する神を崇拝の中心に位置付けておらず、神を水、川に関連付けて信仰の中心にしていることもない。それに対してインド人は、多くの川を神聖視している。なかでも最も広く崇拝されているのが、ガンガー川とその支流であるヤムナー川、神秘の色につつまれたサラスヴァティー川の三大聖河である。これらの河は、神格化され、女神の姿で表わされている⁸⁾。しかし現在、サラスヴァティー河は古代文献に登場する川で、これが実在したかどうか、また実在したとしたら、どこをどのように流れていたかなどについて定説はいまだにない⁹⁾。

ところで、三大聖河の中心ともいえるガンジス川の起源については、『バーガヴァタ・プラーナ』において語られている。

昔・天界、地界、天と地の間の三界は悪魔の王バリに支配されていたので、神々の威厳は地に落ちていた。そこで、神々は、バリ王の手から三界を取り戻すために相談して、ヴィシュヌ神の助けを求めた。ヴィシュヌ神は馬祠祭を行っていたバリ王のもとへバラモン僧の姿で訪れた。王は歓迎し、望みのものはなんでもさしあげようと申し出た。バラモン僧は三步で歩けるだけの土地を要求し、王はその望みをかなえることにした。するとその時、ヴィシュヌ神は、突然神の姿を現わし、一步で全地界をまたぎ、二歩で全世界をまたぎ、巨大な身体で天と地の間をおおって三界を神々の手に戻した。

この時、ブラフマー神は、天界に踏み出されたヴィシュヌ神の足に、恭々しく水をそそぎ、彼の偉業を称えた。ヴィシュヌ神の足首にかかった水は、やがて天界に流れ出し、ガンガーと呼ばれるようになった¹⁰⁾。

ここにおいてガンジスは、ヴィシュヌ神の神話として彼の偉業の象徴として描かれている。ヴィシュヌ神は、三界に比類なき力と知性を併せもつ神として他の神々から頼りにされる存在であり、その神からガンジスは流れ出したのである。つまり、ガンジスはその起源から他の川よりも特別な意味をもつ川となったのである。さらにこのガンジス川が、地上へ降下するエピソードが『ヴィシュヌ・プラーナ』、『バーガヴァタ・プラーナ』、『ラーマーヤナ』などによって伝えられている。

サガラ王の第一王妃にはアサマンジャサという名の息子が、第二王妃には六万人の息子がいた。ある時、サガラ王は馬祠祭をおこない、馬を放った。その馬はインドラに盗まれ、地界に隠されてしまった。王の息子たちは地界のカピラ仙の住居で馬をみつけた。かれらはカピラ仙を盗賊と間違えて殺そうとしたが、逆にカピラ仙により灰燼に帰せられてしまった。サガラ王は息子たちの帰りを待っていたが、かれらが帰らないので孫のアンシュマットに捜させた。彼もまたカピラ仙の住居にいる馬をみつけたが、礼儀正しい少年であったので、カピラ仙は馬を渡し、叔父たちの運命を知らせ、さらに、少年が天国に行けるよう恩恵を授けた。馬祠祭は王により行なわれ、しばらくして王は世を去った。アンシュマットの孫はバギーラタであった。

また、ある時カピラ仙はアンシュマットに、もしガンガーの水が叔父たちの灰にまかれるならば、かれらは天国に行けるだろうと告げた。バギーラタは聖河ガンガーを落下させるため厳しい苦行をしたので、ガンガーは満足し、彼に天界から大地に落下するガンガーを受けとめることができるのは誰かと尋ね、もし誰も受けとめることができないならば、その落下は大地を突き通してしまうであろうと告げた。彼は、それを力のあるシヴァにしかできないと思い、ガンガーの落下をシヴァが頭で受けとめてくれるように願って厳しい苦行をした。シヴァはバギーラタの苦行に満足し、ガンガーを受けとめるためにヒマー

ラヤに赴いた。最初ガンガーはシヴァが落下に耐えられないと思い、大量に非常に強い力で落下した。シヴァはその横柄な態度に腹をたて、ガンガーを見下そうと決意し、もつれた髪でおおわれた頭でガンガーを受けとめ、それが大地に達する前に長い間、髪の手もつれの中にとどめていた。バギーラタの願いにより、シヴァはそれを大地に放った。バギーラタはガンガーの水を叔父たちの灰に導いた。かれらは聖河の水により天国に行くことができた¹¹⁾。

また他にもいくつか神話が存在する。「アガスティア仙が海の水をすべて飲んでしまったが、信心深いバギーラタ王は祖先の灰をゆだね、魂をなだめるための水が必要であった。彼は天の川ガンガーを解き放して地上に運ぼうとした。彼は森で千年苦行し、ついにブラフマ神がガンガーを開放することを認めた。」¹²⁾ という神話もある。このように、ガンジス川の降下に関してはいくつかの神話が存在するが、ほとんどが地上側の人間がその降下を希望し、神や聖仙がその希望を受け入れてガンガーが地上に降下するというものである。ときには神がガンガー女神自身である場合もある。

ところで、インドの川は、富、豊かさ、食物、子孫を礼拝者に与えることができる神として祈願される。聖なる川やそのような川から水の付加によってつくられた聖なる池での沐浴は、すべてのヒンドゥー教徒の不可欠な宗教的義務の一部である。そのような沐浴は、信者の不浄を浄化し、一緒に正しいマントラを唱えた時、多くの罪を洗い流してくれる。特に新月、祭りの日、太陽と月の暗さが信者による沐浴で世界の不浄における不浄の時代を創造するときの天体の食の時に賞賛される。このような時、何千人ものヒンドゥー教徒がインドの聖なる川で沐浴をする¹³⁾。またガンガーは、「幸福を授け、解脱をもたらす母」として知られており、喜び（現世における）と希望（来世における）を表わしている。このようにガンガーは、その水に灰や死骸が委ねられた人の罪を洗い流し、その人に、天上の至福の領域で、神々の中に再生することを保証する川なのである¹⁴⁾。

さらにプラーナの一つにおいては、シヴァ神自身がガンガーを称える讃歌を歌っている。

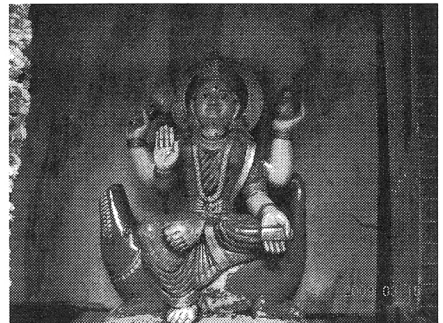
ガンガーは解脱の源である…。何百万回にも上る輪廻転生の間に罪人によって集積された罪の山は、ガンガーの香りをはらんだ風にただ触れるだけで破壊される…。あたかも火が薪を消耗させるように、この流れは邪悪な人びとの罪を消耗させる。聖者はガンガーの階段つきの平場に登る。その上で、聖者はブラフマー自身の高い天を超越する。危険もなく、天の馬車に乗って、聖者はシヴァの居所に赴く。ガンガーの水の近くで行きを引き取った罪人は、一切の罪から解放される。彼等はシヴァの従者となり、その側に住む。彼らはシヴァと同じ姿になる。彼らは決して死なない—たとえ宇宙の全面的な融解の日にも。また、もしもある人物の死体がともかくガンガーの水の中に落ちたならば、その人物はヴィシュヌの身体の皮膚にある孔の数と同じだけの多くの年月の間、ヴィシュヌとともに住む。もしも人が、吉日にガンガーで沐浴を始めたならば、その人は、ヴィシュヌの足跡の数と同じだけの多くの年月の間、ヴィシュヌの天の世界であるヴァイクンタに楽しく暮らすのである¹⁵⁾。

シヴァ神がガンジス川の浄化力を認め、その力を最大限に讃えているのである。そしてガンジス川のガートでの沐浴は特別なだけではなく、天に通じる場所でもあるのだ。

また、しばしば引用される『マハーバーラタ』の節に「もし人の骨だけガンガーの水に触れたならば、その人は名誉にも天国に住むでしょう」というものがある。Kdshi Khanda の Vahika の物語がこれを伝えている。この物語は、牛を殺したり母親を蹴ったりするような男が、森で虎に殺されたが、魂はヤマ（冥界の王）のところへ行き、一つの美德もなかったので地獄行きとなった。身体はハゲタカに食べられたが、1羽のハゲタカが飛んでいる途中で彼の足の骨をガンジス川に落とした。彼は地獄に行くところだったが天国に到着した、というものである¹⁶⁾。ガンジス川の浄化力は、まったく救済の余地のない者の足の骨の一欠けらのみでも天国へ運ぶ力があるほど強力なのである。ヒンドゥー教にはキリスト教の『聖書』やイスラーム教の『クルアーン』のようにすべてのヒンドゥー教徒に共通の聖典は存在しないが、ほとんどのヒンドゥー教徒が聖典扱いする『マハーバーラタ』の記述には大変

な影響力がある。その意味で、この一節は他の神話や説話との関連からもガンジス川の浄化力を決定付けるものであると言えよう。

このようなガンジス川の神格化であるガンガー女神の形態は、乗物として仕える海の怪物の上に立っているというものである。その姿に対して Zimmer は「ベンガルの美しい黒い像において、ガンガーは、天上と地上の活力と甘美さを具現したものとして表出されている。ガンガーは、健康と豊かさ、威厳と力の化身である。高価な冠がその額を縁取っている。首飾りは胸にまで下がっている。高価な装飾品と、帯と腰布の鎖とは、ガンガーの富を授ける徳を示している。」と描写している。さらに「女神ガンガーの身体との物理的な接触は、帰依者の本性を自動的に改変する魔術的な効果を持っている。あたかも純化と錬金の錬金術の過程によるかのように、帰依者の地上の本性という元の金属は昇華されるようになる。帰依者は、最高で永遠の領域の神的な本質を体現したものとなる。」としている。まさにガンガー女神の特徴を正確に表現している。ヴァラナシのガートのガンガー女神像（右写真）もワニを乗り物とし金色の腰帯と首飾りをした女神として表現されている。ただし、ベンガルの像は黒だが、ヴァラナシは白であり、通常、黒は先住民、白はアーリア人を表わす。ガンガー女神を先住民的神とするのか、あるいはアーリア的神とするのかは、地域によって異なるようである。

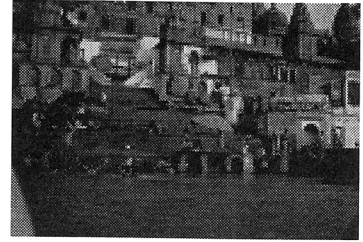


ガンガー女神

3. ガート信仰の調査事例

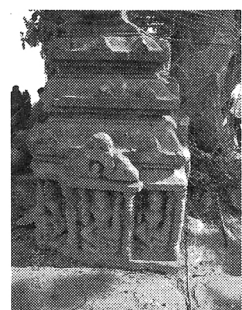
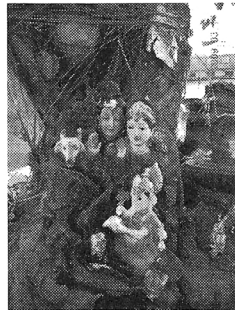
ヴァラナシには多くのガートが建設されている。ガートとは沐浴をし、神に祈るところであり、川に向かって階段が設置されている。プラーナ神話ではガンジス川沿いの96ヶ所を聖なる地点とみなしている。これは宇宙的象徴と考えられる12黄道帯と8方向からきている。しかし16世紀には84ガートに集約された。84ガートの

うち Asi, Dashashvamedha, Manikarnika, Pachaganga, Adikeshava をもっとも聖なる場所としている。この5つのガートで沐浴するのはすべてのガートで沐浴するのと同じ価値があり、各ガートは頭、胸、臍、腿、脚としてヴィシュヌ神の小宇宙の身体を象徴する¹⁷⁾。



本調査は、2009年3月にヴァラナシで行なったが、Asi Ghat から Durga Ghat までを対象とした。この地域のガート数は文献では68ガートとなっているが、実際に確認することができたのは49ガートであり、神像などがあるのは44ガートであった。そのうちもっとも神像が多かったのは Panchganga であった。以下、ガートの歴史的背景と調査によって確認したガートの実態について報告する¹⁸⁾。

1. Assi Ghat はヴァラナシ最南端のガートで、西から流れ込む Assi 川との合流地点である。Assi はサンスクリット語で「剣」を意味し、外部から聖地に悪が侵入するのを防いでいるといわれている。Panchatirthi 巡礼路はここから始まる¹⁹⁾。このガートは、大木2本および他の木2本を中心とし、そのまわりに神像が取り囲む形で配置されていた。



2. Tulsi Ghat は、『ラーマーヤナ』の人気のあるバージョンを書いた詩人 Tulsi (1547-1623) にちなんで名づけられた。彼は晩年をここで過ごした。ここには階段脇にガネーシャ像が設置されていた。
3. Bhadaini Ghat は11世紀後半に碑文に記されており、その存在が確認できる。しかしこのガートには神像が存在していなかった。

4. Janki Ghat は、19世紀中頃に建てられたガートで、僧院の聖母にちなんで名付けられた。階段上にガネーシャとリングが設置されていた。
5. Anandamayee Ghat は、ベンガル出身の女性聖者アーナンドマイー・マーのアシユラムと病院がある。炉のまわりにハヌマーン、リング、ナンディ、ガネーシャ、その他2つを竹で囲んでいた。
6. Vatsaraj Ghat はガンガー女神が設置されていた。
7. Jain Ghat の地域には多くのジャイナ教徒が住んでいるが、神像はなかった。
8. Shrinishadraj Ghat は神像などはなかった。
9. Chet Singh Ghat は、小さな要塞として15世紀中頃に宮殿が建てられた。1781年の Warren Hasting と Chet Sing の激戦の証拠である。神像などはなかった。
10. Niranjani Ghat は Kumar Gupta I (5世紀)に関係づけられたガートで、シヴァ神の第2の息子である Karttikeya の寺院がある。ラーマ像のみ設置されていた。
11. Hivala Ghat は、シヴァ寺院を象徴し、近くに Svapaneshvara Shiva と Svapaneshvari Devi の寺院がある。ここにはシヴァ寺院、ハヌマーンとクリシュナ像が設置されていた。
12. Hanuman Ghat はハヌマーン神から名付けられた。ハヌマーンのそそり立つリングは Hanumadishvara としていられている。クリシュナバクティの哲学的再生の基礎を築いた導師 Vallabha (15世紀後半から16世紀)の出生地として知られている²⁰⁾。ガネーシャ、リング3、ナンディ2が設置されていた。
13. Purachin Hanuman Ghat は、鉄の囲いの中にナンディとリング2があった。
14. Karnatak State Ghat は、リング2、へび、神像、男女像(シヴァとパールヴァーティ)2、ナンディに乗ったシヴァ神が設置されていた。
15. Harishchandra Ghat は、第2の火葬場で南の火葬ガートである。ラーマ神の祖先であるアヨーディヤの Harishchandra が神の試練を受け、国を失って火葬職人になったが、約束を硬く守ったのですべてを取り戻すことができたとい神話的に信じられている場所である。祠にガネーシャ、リング、男女像、カーリー、

ハヌマーン、炉があった。

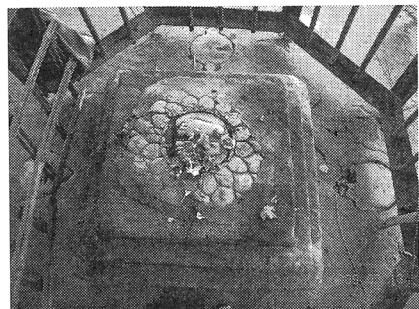
16. Lali Ghat は、北側部分は1990年にハリドワルの Dandi Svami Bhumananda の記念で名付けられた。リングとナンディが設置されていた。
17. Vijayanagaram Ghat は、19世紀後半に建てられ、南インドの昔の王国にちなんで名付けられたが、神像などはなかった。
18. Kedar Ghat は、シヴァの三叉の銚の歯のひとつとヒマラヤの彼の家を象徴している。11世紀後半の Gahadavala 碑文にこのガートは書かれている。ヴァラナシの聖域は3つに分割され、南部分は Kedareshvara を神とするこのガートであるという。ここには4つの祠を中心にナンディ3、リング（巨大、大、中、小）14、ガネーシャ、シヴァ像が設置されていた。
19. Kshameshwar Ghat は、シヴァリングにちなんで名付けられた。祠にリング、ナンディ、その他四方面に神像、建物の中に祠があり、リング、ガネーシャ、炉に三叉の銚2本があり、サドゥが住んでいた。
20. Manasarowar Ghat は西インドの Man Singh 王によって16世紀後半に建てられた。チベットの有名な湖を象徴する近くの神聖な井戸にちなんで名付けられた。神像等は存在しなかった。
21. Narad Ghat は木の周りにリング8、祠にハヌマーン、リング4、ナンディ、ガネーシャ、へび2頭、祠にリングがあり、リングは神話の聖仙 Narada によって設置されたという。
22. Raja Ghat は、マラータ王によって18世紀に建てられた。ガート上にあるシヴァの4つの寺院で知られているが、ガートそのものにはなにもなかった。
23. Babuapandy Ghat はハヌマーンが設置されていた。
24. Panday Ghat は、1805年に有名な Babua Pande を記念して建てられた。祠にリング4、ハヌマーンが設置されていた。
25. Chousatti Ghat は、偉大なサンスクリット学者 Mudhusudar Sarasvati (1540-1623) が名付けた Yogini tirtha を象徴するガートであるが、神像等は確認できなかった。

26. Rana Mahal Ghat は、RanaMahal にちなんで名付けられた。リングの祠 3、足 2、リング 1 を確認することができた。
27. Darbhaga Ghat は、1915年に Darbhanga の王 Bihar が建てた。ハヌマーン、リング、ナンディが設置されていた。
28. Munshi Ghat は、Sridhar Narayan Munshi の記念で Darbhaga Ghat の北部分は Munshi Ghat として知られている。1812年に引退した Nagpur の大蔵大臣で、晩年はヴァラナシに定住し、1824年にここでもなくなった。神像等は確認できなかった。
29. Ahilya Bai Ghat は、中央インドの Indore の Ahilyabai Holker 女王が18世紀後半に建てた。
30. Prayag Ghat は、128Km 西にある Prayag (Allahabad) の聖地を再生している。
31. Dasaswamedh Ghat は、二つの部分に分けられる。

二つの部分の間は Prayaga Ghat である。このガートは 3 世紀ごろ Bhara Shiva Nagas 王によって馬祀祭と関連づけられた最初の歴史的記録の都市と考えられる。Balaji Bajirao が1748年に現在の形に建てた。また、古代の神話に従ってこの都市でブラフマ神が10 (dasha-) の馬 (-ashva) を神に捧げた (-medha) に由来する名前である。四つの頭の Brahmeshvara リングはこの物語を誠実に明示している。このガートの両部分に川の女神ガンガーの聖堂がある。隣接したガートはかつては 3 世紀に馬の保護者の記念でいけにえの儀礼の馬を収納する Ashva / GhodaGhat として知られていた。Dasaswamedh Ghat と Ahilya Bai Ghat、Prayag Ghat、Dr. Rajendra Prasad Ghat はつながっているため、神像はこの 4 ガートを合わせて確認した。リング 8、シヴァ神 1、シヴァとパールパーティー 1、シヴァファミリー 1、三又の鉾 2、ナンディ 2、ガネーシャ 4、ドゥルガー女神 3、ガンガー女神 2、サラスヴァティー 1、ハヌマーン 1、クリシュナとラーダ 2、他神像11であった。
32. Dr. Rajendra Prasad Ghat は、1979年にインド共和国の最初の大統領から名付け

られた。

33. Manmandir Ghat は、ラジャスタンの王 Savai ManSingh (1585-1605) によって建てられた宮殿が位置し、その後ジャイ・スィン 2 世がその上に天文台を築いた。神像等は無かった。
34. Tripurabharavi Ghat は、Tripurabharavi 女神につなんで名付けられた。ガネーシャ、リンガ、ナンディ、シヴァと女神が設置されていた。
35. Mir はリンガ 5、シヴァ、ハヌマーン、ガネーシャ、他 3 神像が確認できた。
36. Lalita は、ネパール寺院があり、ガネーシャ 2、リンガ 6、サドウが設置されていた。
37. Manikarnika Ghat は、火葬場である。南と北の部分に分かれており、30Km 北にはヴィシュヌ神の足跡を象徴する大理石 Charanapaduka の聖地がある。Manikarnika とは宝石の耳飾りのことであるが、名前の由来は、「ヴィシュヌ神が池のほとりで苦行に励んでいるとシヴァが現れてなんでも願い事を叶える約束をした。シヴァのいるこの都に永遠に住みたいというシヴァ神は喜びにうちふるえて耳飾りが池の中に落ちた」という神話からである。ここは世界の破壊と創造の場であるといわれており、時の初めにヴィシュヌ神によって掘られた神聖な井戸と創造された秩序が終わりに燃える場所という両方を含んだところである²¹⁾。また、1850年に Amethy の王によって建てられたシヴァードウルガー寺院がある。シヴァ寺院内にはリンガ 3、三又の鉾 4、外にはシャクティ 1、ハヌマーン 2、リンガ 10、ヴィシュヌ神の足 1、ナンディ 2 を確認することができた。



38. Scindia Ghat は、賢人 Vishvanara が苦行をし、シヴァの息子から願い事として受け取ったというのはここである。祠にクリシュナ2体、ラーダ2体、ハヌマーン、ラーム、シーター、ガネーシャ、外にリング5、ガネーシャ、炉があり、リング2と三叉の鉾が設置されていた。
39. Sankatha Ghat はハヌマーン2体、リング11、ナンディ、ガネーシャ、シヴァが確認できた。
40. Ganga Mahal Ghat は祠にリング、外にリング3つ、シヴァ、ナンディ、ラーム2体。
41. Bhonsale Ghat はハヌマーン、ガネーシャ4体、シヴァ2体、シヴァと女神、リングとナンディ、他1神。
42. Ganesh Ghat は何もなかった。
43. Mehta Ghat は、1962年に建てられた V.S.Mehta 病院にちなんで名付けられた。神像が多数と足像があった。
44. Ram Ghat は、ラマの寺院と BadriNarayana に関連したガートであるが、神像等はない。
45. Jatar Ghat はリング、4神像、6神像、ガネーシャがあった。
46. Raja Gwalior Ghat は何もなかった。
47. Balaji Ghat は祠にリング、ナンディが設置されていた。
48. Panchganga Ghat は、ガンガー、ヤムナー、サラスヴァティー、ドゥーパパーパー、キナーラーの五つの川が伝説的に合流する場所である。Kartika 月の間、祖先への供物として灯明を入れたかごをつけた竹竿のが立てられる。祖先祭の日に108の灯明を照らすの石柱に立てる。この月の間、シヴァ神を含むすべての神が毎日ここで沐浴をするといわれている²²⁾。この地域には11世紀にヴィシュヌ寺院が建てられ、15世紀に破壊され、最終的には1673年にムガル皇帝 Aurangzeb によってもモス



クに建て替えられた。このガートには43カ所の祠などがあり、おおよそであるがリング220、ナンディ牛52、ガネーシャ17、シヴァ4、はぬまーん6、ヘビ2、男神4、女神4、ガンガー女神2を確認することができた。

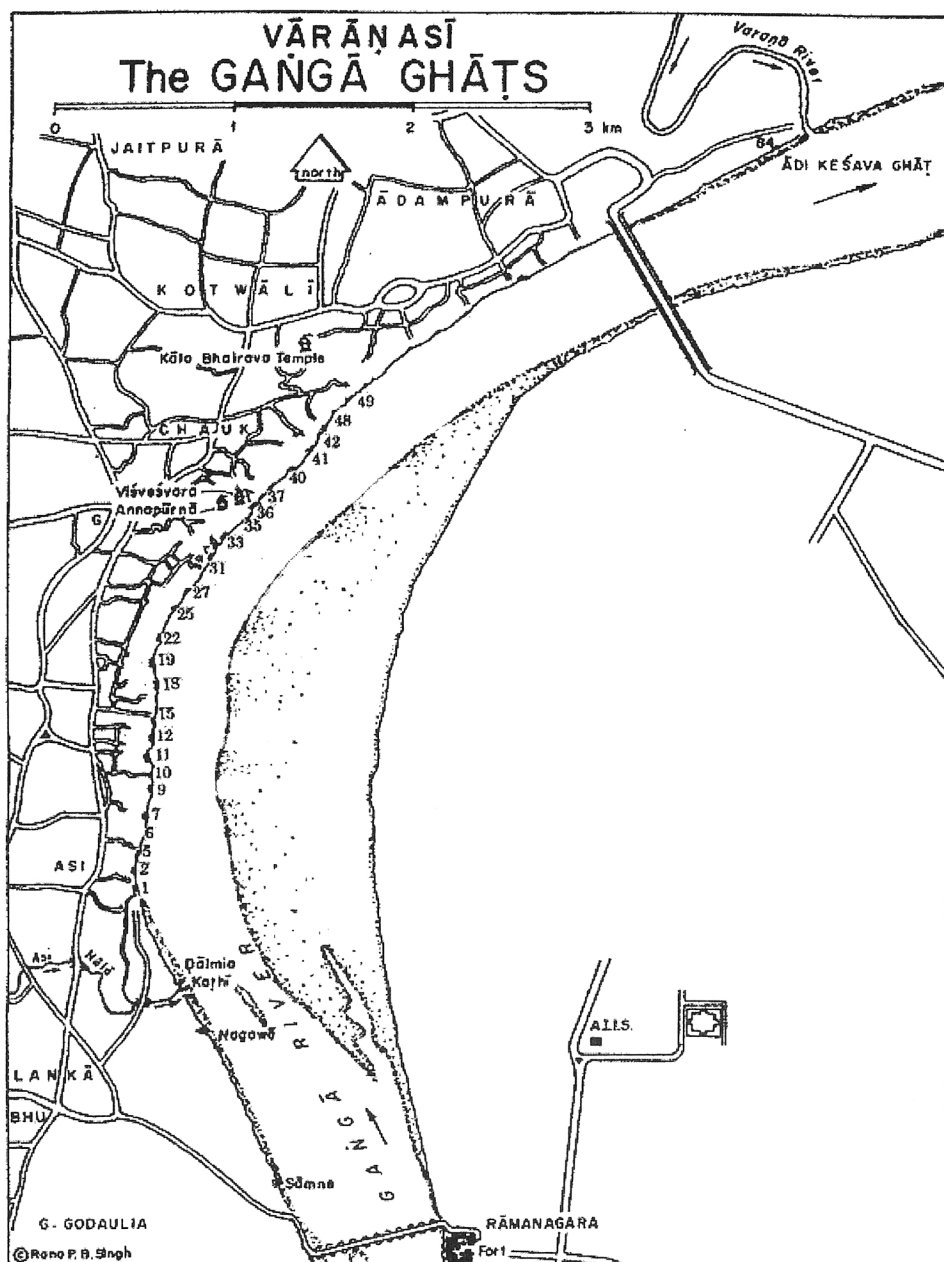
49. Durga Ghat はリング11、ドゥルガー、他2神を確認することができた。

プラーナ神話では96ガート、Varadaraja Girvana Pada Mañjari (1600-1660) は22ガートをリストにしているが、16世紀には川岸の長さを6.5Km にして84ガートに集約した。Jayanarayan Ghoshal (1800-1810) の Kashi Parikrama は70ガート、Prinsep (1822) は58ガート、インドの測量では59 (1920)、Kasi Tirtha Sudhar Trust (1931) は77、Rama Bachham Singh (1973) は66をリストにしている²³⁾。

本調査では、この地域のガート数は文献では68ガートになっているが²⁴⁾、実際に確認することができたのは49ガートのみであった。ここでは、各ガートにはヒンディー語または英語でガート名が表記されているが、表記が確認できなかったもの、または地図上ではガートがあるはずの場所になかったものを確認できなかったとしている。確認できなかったガートは、Ganga Mahal、Rivan (Rewan)、Nishadaraia、Panchakota、Prabhu、Mahanirvani、Gularia、Dandi、(Cremation Ghat)、Chauki、Khorī、Sarveshvara、Digpatia、Dashashvamedha、Tripura Bhairavi、Yajneshvara / Naya、Nepali、Bauli / Umraogiri、Jalashyi、Khiraki、Cremation Ghat、Baji Rao、Naya、Mangala Gauri、Venimadhava である。一方、リストにない Shrinishadraj、Babuapandy、Balaji の3ガートを確認した。ガートの統廃合が行われていると考えられる。また、ガートは存在しているにも関わらず、神像などを確認できなかったガートが5ヶ所あった。ガート本来の意味からすれば、沐浴によってガンジス川で浄化することが目的であるから必ずしも神像などは必要ない。しかし、ヒンドゥー教の関連施設では複数の神像や神を象徴する像、絵画などが設置されているのが通常である。5ガートのうち3ガートは戦争や官僚の記念として名付けられたり建てられたりしたものであり、神に関する神話や伝説がないガートである。

4. 結 語

路地における調査では、シヴァ神は主にリングの形態で信仰されていた。しかしながらガンジス川沿いのガートではリングとともに神像での信仰も多かった。シヴァ神の神像とリングの形態の相違に関して Zimmer は次のように考察している。シヴァの寺院における基本的で最も普通の崇拝の対象は男根、すなわちリングムである。リングムは、シヴァの男性的な創造エネルギーを示しており、この神の他の一切の表出と対照的に、「固定された、ないし不動の」、「根本的な形態」と呼ばれている。これと比べると、他の表出は第二次的であると見なされる。人間の形をした像は、「動的な」、「祭ないし儀式的像」、「祭の享受のための像」として知られている。これらは、祝福の際の行列の中で運ばれたり、崇拝者の啓発のために寺院の広間や回廊に置かれることになっている²⁵⁾。つまり、シヴァ神の本来の表出形態はリングのほうであって、神像は神として理解しやすい形態としてヒンドゥー教徒に対する啓発や祭りのためのものであるというのだ。しかし、ヴァラナシにおいては、路地での信仰は聖地巡礼路の内側、つまりシヴァ神のリングが現われた場所であるということもありリング信仰が強いと考えられるが、これに対してガンジス川はシヴァ神そのもののにつながる川であることからシヴァ神像の形態での信仰が強いと考えられる。また、ガンジス川に対する信仰は第一義的にはその強力な浄化力であって、創造エネルギーではないのである。つまり、シヴァ神から流れ、あらゆる罪障を浄化してくれる女神ガンガーによってヴァラナシは聖地として特別な都市であり、焼かれた死体はガンジスの水に浸されて、死者の魂は天へとのぼっていく場所なのである。ガンジス川の信仰は、女神信仰、シヴァ信仰と結びついて生と死、再生を体験する川として聖地を形成しているのである。そして、ヴァラナシはリング信仰に支えられ、ガンジス川の信仰が重層的に重なった宗教都市の構造を形成しているのである。



Singh, Rana P.B. and Rana, P.S, Banaras Region. A Spiritual & Cultural Guide, Indica Books, Varanasi, 2002, p 88の地図を元に作成

VARANASI の Ghat

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 . Assi | 26. Rana Mahal |
| 2 . Tulsi | 27. Darbhanga |
| 3 . Bhadaini | 28. Munsii |
| 4 . Janki | 29. Ahalya Bai |
| 5 . Anadamayi | 30. Prayag |
| 6 . Vatsaraj | 31. Dashashwamedh |
| 7 . Jain | 32. Rajendra Prasad |
| 8 . Shrinishadraj | 33. Manmandir |
| 9 . Chet Singh | 34. Tripurabhairavi |
| 10. Niranjani | 35. Mir |
| 11. Shivala | 36. Lalita |
| 12. Hanuman | 37. Manikarnika |
| 13. Purachin Hanuman | 38. Scindia |
| 14. Karnatak State | 39. Sankatha |
| 15. Harishchandra | 40. Ganga Mahal |
| 16. Lali | 41. Bhomsala |
| 17. Vijayanagaram | 42. Ganesh |
| 18. Kedar | 43. Mehta |
| 19. Kshemeshwar | 44. Ram |
| 20. Manasarowar | 45. Jatar |
| 21. Narad | 46. Raja Gwlior |
| 22. Raja | 47. Balaji |
| 23. Babuapandy | 48. Panchganga |
| 24. Pandey | 49. Durga |
| 25. Chausathi | |

註

- 1) 斎藤昭俊『インド聖地考』国書刊行会, 1985年, p106
- 2) 宮本久義『ヒンドゥー聖地 思索の旅』山川出版, 2003, pp157-158
- 3) Diana L. Eck “BANARAS – City of Light” Penguin Books India, 1993, p94
- 4) 拙論「ヴァラナシにおける宗教都市の機能と信仰」(『二松学舎大学論集第50号』) 2007年, pp29-45
- 5) 秋道智彌編『水と文明 – 制御と共存の新たな視点 – 』昭和堂, 2010年, p25
- 6) Ibid, pp94-96
- 7) Ibid, pp97-98
- 8) 立川武蔵, 石黒敦, 菱田邦男, 島岩『ヒンドゥーの神々』せりか書房, 1990年, p207
- 9) 秋道智彌編, p58
- 10) 立川武蔵, 石黒敦, 菱田邦男, 島岩, p208
- 11) Ibid, pp97-99
- 12) Lannoy, Richard., BENARES : A World Within a World, Indica Books, Varanasi, 2002, p97
- 13) Edited by Morgan, Kenneth W., The Religion of the Hindus, Motilal Banarsidass, India, reprinted 1987, p112
- 14) Heinrich Zimmer., “Myths and Symbols in Indian Art and Civilization” Harper&Row, 1946／宮元啓一訳『インド・アート』せりか書房, 1988年, p150
- 15) Ibid, pp150-151
- 16) Diana L. Eck, p216
- 17) 斎藤昭俊, pp85-87
- 18) ガートの歴史的背景については、Singh, Rana P.B. and Rana, P.S, Banaras Region. A Spiritual & Cultural Guide Indica Books, Varanasi, 2002を参照
- 19) Diana L. Eck, p222
- 20) Ibid, p223
- 21) Ibid, p238
- 22) Ibid, p237
- 23) Chandramouki, K., Luminous Kashi to Vibrant Varanasi, Indica Books, Varanasi, 2006, p278
- 24) Singh, Rana P.B. and Rana, P.S, p89
- 25) Heinrich Zimmer, pp170-171